令和八年度　長岡大学　一般選抜（３期）

国語

一　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

近代のアートは「神の死」(注)から始まりました。

それまで美術といえば神の栄光の反映か、あるいは地上の支配神ともいうべき、選ばれし王や貴族のものだったのです。だから、近代以前ではアートは存在していなかったといってもよいでしょう。それは徹頭徹尾、(注)市民によるものなのです。

ア キリスト教が全盛だった頃の教会を思い浮かべてみてください。そこには、(注)ゴチック様式の建物があり、聖書が読まれ、賛美歌が鳴り響き、ステンドグラスや聖像が人々の目を奪ったことでしょう。けれどもそれらは、私たちが今考えるような意味での「建築」でも「文学」でも「音楽」でも「美術（アート）」でもありませんでした。私たちは、神が死に、代わって市民が主役となった近代以後の教育を受けています。だから、それらを、「建築史」「文学史」「音楽史」「美術史」という、互いに独立したジャンル（種）の中で考えるよう慣らされています。でも、当時はそんな考え方はありませんでした。

教会は「建築」ではなく、地上で神の秩序が降り立つための器でしたし、賛美歌はその恩寵（おんちょう）を称えるための祈りでした。聖書は何度でもそこに立ち返るべき(注)原典（ロゴス）と呼ぶべき存在でしたし、ステンドグラスや聖像は無知なる人々を正しい教えへと導くための道標（イメージ）として必要とされたのです。つまり、全ては緊密に関係し合っていました。「石で築かれたもの」「文字で書かれたもの」「声で唄（うた）われたもの」「絵の具で描かれたもの」というだけで、互いを歴史的に切り離すことには、なんの意味もなかったのです。

それぞれが、神のA顕現のために必要欠くべからざるものであり、どれ一つが欠けても、地上に神の王国は実現できない。イそのような性質のものだったのです。全ては神の思（おぼ）し召しであり、神の所有にB帰属していたのです。そこに孤立はありません。

つまり、私たちが日頃なにげなく使っている「ジャンル（種の分離）」という考えは、当時ではなんの意味ももたなかったのです。

「ジャンル」というのは、その意味では近代に固有の概念なのです。

では、緊密により合わされていた、この神的な秩序が崩れ去ったのはなぜでしょうか。「神が死んだ」からです。「神が死んだ」というのは、この世界から中心が消えたことを意味します。

世界に中心があるかぎり、その下部（しもべ）は中心にどれくらい近いか、そこからどれだけ遠ざけられているかにより、「身分」と呼ばれるもので差別されています。

いうまでもなく神は大変に貴重な存在ですから、その間近まで行ける人物は、あまり多く存在してはなりません。王や貴族、僧侶といった特権階級は、その恩恵に与（あずか）ることができる、いってみれば選民です。反対に大部分の大衆は、偉大な光からかぎりなく遠くあるほかありませんでした。人の価値は、（今とは異なる意味で）平等ではなかったのです。こうして、「神」は世界に秩序を与えると同時に、反面では差別の温床でもあったのです。

でも、世界から中心が消えたら、どうなるでしょうか。当然、全ては互いに等価ということになるでしょう。そこに差別は存在しません。それまでは、神という天界の一点から吊（つ）り下げられるかたちで、世界に存在するありとあらゆるものは(注)ヒエラルキーに属しました。教義の正統／(注)異端や人の貴賤（きせん）は、全てそこから割り出されたものです。この糸が切られたのです。同時に距離というものも失われました。神からの遠近がない世界です。

わたしたちは誤解しがちですが、これを「平等」とか「民主主義」とかいうのです。それらは決して(注)先天的な「よきもの」ではありません。喪失に起源があるからです。きわめて不安定で、相対的な世界です。

では、教会の秩序はどうなったでしょうか。それまでは、建物としての教会も聖書も賛美歌もステンドグラスも聖像も、互いに緊密な関係を保っていました。しかしその緊密さは、実はそれぞれが神という天界の一点を共有して地上に吊り下げられている、その共通の糸によって守られていたものにすぎません。共通の一点によって結ばれていた糸が切れれば、おのずと、互いの関係も

また失われてしまうことは避けられません。こうして、教会は神の器であるよりも「石で築かれたもの」となり、聖書は神の声であるよりも「文字で書かれたもの」となり、賛美歌は神の招喚儀礼ではなく「声で唄われたもの」となり、ステンドグラスや聖像は神への導きではなく「絵の具で描かれたもの」となったのです。

私たちが今「建築」「文学」「音楽」「美術」というふうに呼んでいるものは、こうして生まれました。その担い手は、もはや特権階級ではありません。一人一人の個人が、その主役となるのです。「作家」もまた神の秩序をC仮託されたものではなく、作品を通じて自己の内面を検証する孤独な存在として、この時生まれました。これが今日、ジャンルと呼ばれるものが誕生した瞬間なのです。それは近代そのものといっても過言ではないでしょう。

そこで、新たな問題が生じました。「神が死んだ」ことによって、全ての人や創作物が互いに自由で平等になったのはよい。しかし、では今度はいったい誰が、その人がその人であることを、その創作物が確かな価値たりうることを保証するのか、という問題です。

それまでは簡単でした。その人がその人であるのは、神との関係においてのことでした。ある創作物が意味をもつのは、それが神の秩序の中で一定の役割を与えられているからでした。今や、その全てが失われたのです。

いったい、建築は自らが建築であることを、文学は自らが文学であることを、音楽は自らが音楽であることを、美術は自らが美術であることを、どうやって保証し、基礎づけたらよいのでしょうか。神を復活させることは、もうできません。王に守ってもらうことも、もうできないのです。彼らは死んでしまったから。彼らを殺し、自由の身になったのはよかった。でも、気がつけば私たちは、何もない荒野に立たされていた、というわけです。作品は、どこにも続かないがらんとした部屋に、光を失ったまま置き去りにされていたのです。

ウ 神なき時代に、一枚の絵はどうやって一枚の絵たりうるのか。

それ以前であれば、聖人(注)を描いても、天使を描いても、それは神との関係において、一枚の実質ある絵たりえていました。もちろん、うまい下手はあるでしょう。けれども、たとえ下手でも、それは絵が絵としての意味をもつこと自体まで妨げるものではありませんでした。ところが今では、たとえ超絶的に巧みに描かれていたとしても、神との関係から何かが描かれていない以上、それだけで絵が絵としての価値をもつことはできないのです。

では、どうすればよいのか。その際に重要となったのが、隣接ジャンルからのD弁別という考えです。これはちょっと難しい言い方ですが、具体的には以下のようなことです。

絵画は彫刻ではないものであり、建築ではないものであり、演劇ではないものであり、文学ではないものであり、音楽ではないものである（以下同）。言いかえれば、他の表現領域でやれることを一つ一つ排していって、その結果残ったものが、絵画の実質なのだ、と。つまり、絵は絵にしかできないことをやればよい。

要するに、かつては天上界の神との関係で調和を保っていた、隣接する表現領域のいずれとも自分は関係がない。それらでは表現できないことをきっちり示してみせることが、自己が自己であることの証明になる、ということです。これは、大変いやらしい考え方ですね。隣人との調和ではなくて、それとの差別化において、初めて自己は自己たりうるというのですから。

エ ところで、これが近代以後の個人主義(注)にも通ずる話であることは、既にお気づきのことでしょう。共同体が解体した後、一人の人間は他者との区別においてのみ、かろうじて個人たりえています。人は、お互いとの冷たい弁別において初めて、なにものにも代えがたい自己たりうるのだと。

もちろん、一枚の絵を描くのは一個の人間であるのだから、両者は密接に関係しています。つまり、一枚の絵は隣接する表現との周到な区別において作品たりえ、同時にその描き手は他者や隣人との熾烈(しれつ)な競争において、一人の作家たりうるのです。この孤独な描き手と、彼が生み出す孤立した作品との一対において、近代芸術は成立しています。

（椹木　野衣『反アート入門』による）

（注）神の死　…哲学者ニーチェ（一八四四―一九〇〇）の言葉に由来する。ここでは超越的価値に対する信仰が失われ、人間社会の諸価値が根拠を失った近代ヨーロッパの状況をさす。

市民　…ここでは貴族・聖職者が支配する封建社会を倒した、近代社会を構成する自立的個人、政治に参加する主体となる者をさす。

ゴチック様式　…十二世紀前半にパリを中心とするフランスで始まり、十六世紀にいたるまで広くヨーロッパ各地に影響を与えた建築・美術の様式。建築物では大聖堂の尖頭（せんとう）アーチやステンドグラスなどが特徴。

原典　…「ロゴス」とは「理性」「言語」などを意味するギリシャ語。ここでは聖書が世界の真理を支える役割をもつ書物であったことを踏まえ、このようなルビをつけている。

ヒエラルキー　…**Hierarchie**［独］上下関係によって、階層的に秩序づけられた組織の体系。

異端　…宗教の内部で、正統信仰とは異なる立場をとる教説。

先天的　…生まれつき備わっているさま。対義語は「後天的」。

聖人　…ここでは、信仰と徳に秀でた人に与えられた称号。

奇蹟　…ここでは、神のはたらきによって起こる超自然的な現象。

個人主義　…国家・社会の権威に対して個人の意義と価値を重視し、その権利と自由を尊重する考え方。

問一　傍線部A～Dの言葉について、本文に即してそれぞれの意味に最も近いものを次の1～8から一つずつ選び、番号で答えなさい。

A　1　出現　2　排除　3　潜伏　4　委任
B　5　所属　6　象徴　7　包含　8　識別

問二　波線部ア「キリスト教が全盛だった頃」に関連して、次の文章は本文の内容を要約したものである。空欄①～③に入る語句として最も適切なものを、本文中から抜き出して答えなさい。

キリスト教が全盛だった頃、世界は（　①　）を中心とする秩序のもとにあり、人間や創作物はその関係の中で価値や役割を与えられていた。しかし「神が死んだ」後には世界の（　②　）が失われ、すべてが互いに自由で（　③　）となった結果、個人や作品は自らの価値を自ら証明しなければならなくなった。

問三　波線部イ「そのような性質」とはどのような性質か、本文の内容を踏まえて、「神」「必要欠くべからざる」「関係」の三つの語をすべて用い、六十～八十字で説明しなさい（句読点を含む）。

問四　波線部ウ「神なき時代に、一枚の絵はどうやって一枚の絵たりうるのか」とあるが、この「神なき時代」において、「一枚の絵」と「一人の作家」はどのようにしてその価値を証明すると筆者は述べているか。その説明として最も適切なものを次から一つ選んで、番号で答えなさい。

1　一枚の絵は、神や宗教的価値との関係を回復することによってのみ、その存在意義を保つことができる。したがって作家もまた、自らの信仰を深め、神の意志を表現することを通じて、自らの作品と自己の価値を保証することができるのである。神との結びつきこそが、作品と作家の価値の唯一の根拠となるのである。

2　一枚の絵は、隣接する表現領域との違いを明確にし、他のジャンルでは表現できない独自の特質を示すことによって、その存在価値を証明する。同様に作家もまた、他者との違いを際立たせることによってのみ、代替不可能な個人としての価値を確立することができるのであり、差異の明示こそが価値の根拠となるのである。

3　一枚の絵は、より多くの人々に理解され、社会から広く受け入れられることによって、その価値を証明することができる。作家もまた、多くの人々の支持や評価を得ることによってのみ、その存在意義を確かなものとすることができるのであり、社会的承認こそが価値の最終的な基準となるのである。

4　一枚の絵は、伝統的な技法を忠実に継承し、過去の芸術の様式に従うことによって、その正当性を維持することができる。作家もまた、先人の業績を模倣し、その流れの中に自らを位置づけることによって、芸術家としての価値を証明することができるのである。伝統への忠実さが価値の基盤となるのである。

5　一枚の絵は、作家の内面的感情を自由に表現することによってのみ、その価値を持つことができる。作家もまた、他者との関係を断ち、自らの内面だけに向き合うことによって、純粋な創造者としての価値を確立することができるのである。内面的真実の表現こそが価値の本質なのである。

問五　波線部エ「近代以降の個人主義」について、筆者は「近代芸術」と「近代以降の個人主義」には共通点があると主張している。以下にはその説明として適切な文章が複数含まれている。適切な文章をすべて選び、番号で答えなさい（不正解が記入された場合は減点する）。

1　近代芸術においては、一枚の絵が他の表現領域との違いを明確にすることによってのみ成立するようになった。同様に近代以降の個人主義においても、人は他者との差異を示すことによってのみ、自らがかけがえのない個人として存在することが可能となったのである。

2　近代芸術は、それまでのように神の秩序に従うのではなく、個人の自由な創造によって成立するようになった。また近代以降の個人主義も、人が神や社会の規範から解放されることで成立した点において共通しているのであり、いずれも外的権威からの解放を基礎としているのである。

3　近代芸術は、それぞれのジャンルが再び統合され、互いに協力し合うことによって成立するようになった。同様に近代以降の個人主義においても、人は他者との調和の中で自己を確立することが可能となり、相互の結びつきが価値の基盤となったのである。

4　近代芸術においては、作品は他の表現形式では表現できない独自の特質を示すことによって成立する。同様に近代以降の個人主義においても、人は他者との区別においてのみ個人として成立するのであり、いずれも他との弁別によって自己の存在が証明されるのである。

5　近代芸術は、社会の多くの人々に理解され、広く受け入れられることによって成立するようになった。また近代以降の個人主義においても、人は社会からの承認を得ることによって個人としての価値を確立することができるのであり、社会的評価が共通の基盤となっているのである。

二　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

フロイト(注)によれば、人間の自己愛は過去に三度ほど大きな痛手を被ったことがあるという。一度めは、コペルニクス(注)によって地球が天体宇宙の中心から追放された時に、二度めは、ダーウィン(注)の進化論によって人類が動物世界の中心から追放された時に、そして三度めは、フロイト自身の無意識の発見によって自己意識が人間の心的世界の中心から追放された時に。

しかしながら実は、人間の自己愛には、少なくともう一つ、フロイトが語らなかった傷が秘められている。だが、それがどのような傷であるかを語るためには、ここでいささか回り道をして、まずは「ヴェニスの商人」(注)について語らなければならない。

ヴェニスの商人――それは、人類の歴史の中で「ノアの洪水以前」(注)から存在していた商業資本主義の体現者のことである。海をはるか隔てた中国やインドやペルシャまで航海をして絹やコショウや絨毯（じゅうたん）を安く買い、ヨーロッパに持ちかえって高く売りさばく。遠隔地とヨーロッパとの間に存在する価格の差異が、莫大（ばくだい）な利潤として彼の手もとに残ることになる。すなわち、ヴェニスの商人がA体現している商業資本主義とは、地理的に離れた二つの国の間の価格の差異をB媒介して利潤を生み出す方法である。そ

こでは、利潤は差異から生まれている。

だが、経済学という学問は、まさに、このヴェニスの商人を抹殺することから出発した。

年々の労働こそ、いずれの国においても、年々の生活のために消費されるあらゆる必需品と有用な物資を本源的に供給する基金であり、この必需品と有用な物資は、常に国民の労働の直接の生産物であるか、またはそれと交換に他の国から輸入したものである。

『国富論』の冒頭にあるこのアダム・スミス(注)の言葉は、一国の富の増大のためには外国貿易からの利潤を貨幣のかたちで蓄積しなければならないとする、重商主義者に対する挑戦状にほかならない。スミスは、一国の富の真の創造者を、遠隔地との価格の差異を媒介して利潤を稼ぐ商業資本主義のもとで汗水たらして労働する人間に見いだしたのである。それは、経済学における「人間主義宣言」であり、これ以後、経済学は「人間」を中心として展開されることになった。

例えば、リカード(注)やマルクス(注)は、スミスのこの人間主義宣言を、あらゆる商品の交換価値はその生産に必要な労働量によって規定されるという労働価値説として定式化した。C

実際、リカードやマルクスの眼前で進行しつつあった産業革命(注)は、工場制度による大量生産を可能にし、一人の労働者が生産しうる商品の価値(労働生産性)はその労働者が自らの生活を維持していくのに必要な消費財の価値(実質賃金率)を大きく上回るようになったのである。労働者が生産するこの剰余価値――それが、彼らが見いだした産業資本主義における利潤の源泉なのであった。もちろん、この利潤は産業資本家によって搾取されてしまうものではあるが、リカードやマルクスはその源泉をあくまでも労働する主体としての人間に求めていたのである。

だが、産業革命から二百五十年を経た今日、ポスト産業資本主義の名のもとに、旧来の産業資本主義の急速な変貌が伝えられている。ポスト産業資本主義といわれる事態の喧騒(けんそう)の中に、我々は、再びヴェニスの商人の影を見いだすのである。

なぜならば、商品としての情報の価値とは、まさに差異そのものが生み出す価値のことだからである。事実、全ての人間が共有している情報とは、その獲得のためにどれだけ労力がかかったとしても、商品としては無価値である。逆に、ある情報が商品として高価に売れるのは、それを利用する人が他の人とは異なったことができるようになるからであり、それはその情報の開発のためにどれほど多くの労働が投入されたかには無関係なのである。

まさに、ここでも差異が価格を作り出し、したがって、差異が利潤を生み出す。それは、あのヴェニスの商人の資本主義と全く同じ原理にほかならない。すなわち、このポスト産業資本主義の中でも、労働する主体としての人間は、商品の価値の創造者としても、一国の富の創造者としても、もはやその場所をもっていないのである。

いや、更にいうならば、伝統的な経済学の独壇場であるべきあの産業資本主義社会の中においても、我々は、抹殺されていたはずのヴェニスの商人の巨大な亡霊を発見しうるのである。

産業資本主義――それも、実は、一つの遠隔地貿易によって成立している経済機構であったのである。ただし、産業資本主義にとっての遠隔地とは、海のかなたの異国ではなく、一国の内側にある農村のことなのである。

産業資本主義の時代、国内の農村にはいまだに共同体的な相互扶助の原理によって維持されている多数の人口が滞留していた。そして、この農村における過剰人口の存在が、工場労働者の生産性の飛躍的な上昇にもかかわらず、彼らが受け取る実質賃金率の水準を低く抑えることになったのである。たとえ工場労働者の不足によってその実質賃金率が上昇し始めても、農村からただちに人口が都市に流れだし、そこでの賃金率を引き下げてしまうのである。

それゆえ、都市の産業資本家は、都市にいながらにして、あたかも遠隔地交易に従事している商業資本家のように、労働生産性と実質賃金率という二つの異なった価値体系の差異を媒介できることになる。もちろん、アその間の差異が、利潤として彼らの手もとに残ることになる。これが産業資本主義の利潤創出の秘密であり、それはいかに異質に見えようとも、利潤は差異から生まれてくるというあのヴェニスの商人の資本主義と全く同じ原理に基づくものなのである。

この産業資本主義の利潤創出機構を支えてきた労働生産性と実質賃金率との間の差異は、歴史的に長らく安定していた。農村が膨大な過剰人口を抱えていたからである。そして、この差異の歴史的な安定性が、その背後に「人間」という主体の存在を措定してしまう、伝統的な経済学の「錯覚」を許してしまったのである。

かつてマルクスは、人間と人間との社会的な関係によって創り出される商品の価値が、商品そのものの価値として実体化されてしまう認識論的錯覚を、商品の物神化(注)と名づけた。その意味で、差異性という抽象的な関係の背後にリカードやマルクス自身が措定してきた主体としての「人間」とは、まさに物神化、いや人神化の産物にほかならないのである。

差異は差異にすぎない。産業革命から二百五十年、多くの先進資本主義国において、無尽蔵に見えた農村における過剰人口もとうとう枯渇してしまった。実質賃金率が上昇し始め、もはや労働生産性と実質賃金率との間の差異を媒介する産業資本主義の原理によっては、利潤を生み出すことが困難になってきたのである。与えられた差異を媒介するのではなく、自ら媒介すべき差異を意識的に創り出していかなければ、利潤が生み出せなくなってきたのである。その結果が、差異そのものである情報を商品化していく、現在進行中のポスト産業資本主義という喧騒に満ちた事態にほかならない。

差異を媒介して利潤を生み出していたヴェニスの商人の資本主義こそ、まさに普遍的な資本主義であったのである。そして、「人間」は、この資本主義の歴史の中で、一度としてその中心にあったことはなかった。

（岩井 克人『二十一世紀の資本主義論』による）

（注）フロイト　…Sigmund Freud オーストリアの精神医学者。精神分析の創始者として知られる。無意識下に存在する感情や欲求が、人間の自己意識に大きな影響を与えていると唱えた。（一八五六―一九三九）

コペルニクスの地動説　…ポーランドの天文学者コペルニクス（一四七三―一五四三）は、当時主流であった天動説（地球中心説）を覆し、地動説（太陽中心説）を唱えた。

ダーウィンの進化論　…イギリスの自然科学者ダーウィン（一八〇九―一八八二）は、全ての生物種が共通の祖先から、自然選択というプロセスを経て進化したと唱えた。

ヴェニスの商人　…シェークスピアの戯曲『ヴェニスの商人』を踏まえている。

ノアの洪水　…ノアとその家族が方舟（はこぶね）に乗り大洪水の難から逃れるという、『旧約聖書』に記された物語を指す。

アダム・スミス　…Adam Smith イギリスの経済学者。著作『国富論』で重商主義を批判した。（一七二三―一七九〇）

リカード　…David Ricardo アダム・スミスと並ぶイギリスの経済学者。（一七七二―一八二三）

マルクス　…Karl Heinrich Marx ドイツの経済学者・哲学者。（一八一八―一八八三）

産業革命　…十八世紀後半から始まる、産業社会を到来させた技術革新のこと。これにより、工業化が進行し「近代」社会が誕生する。

物神化　…あるものがそれ自体のもっている価値を越えて、崇拝の対象となること。

問一　傍線部A～Eの言葉の意味として、本文に即して最も適切なものをそれぞれ一つずつ次から選び、番号で答えなさい。

A　体現している
1　抽象的な概念を否定していること
2　具体的な姿としてはっきり示していること
3　偶然に同じ性質を持っていること
4　外見だけを真似していること
5　理論的に説明していること

B 媒介して
1 直接的に生み出して
2 完全に排除して
3 間に入って関係を成立させて
4 偶然に結びついて
5 独立して存在して

C 定式化した
1 感覚的に理解した
2 複雑な内容を曖昧にした
3 実験によって否定した
4 理論を明確な形で表現した
5 具体例を数多く集めた

D 措定して
1 仮に存在するものとして考えて
2 実際に存在することを証明して
3 意図的に隠して
4 完全に否定して
5 誤りであると結論づけて

E 枯渇してしまった
1 急速に増加した
2 完全に停止した
3 質が大きく低下した
4 一時的に減少した
5 ほとんど無くなってしまった

問二 波線部ア「その間の差異」とは、何と何の差異をさしているか。次の中から該当する二つを選んで番号で答えなさい。
1 労働者の生活を維持するための消費財の価値
2 労働生産性
3 商品としての情報の価値
4 共有されている情報の価値
5 外国貿易によって得られる貨幣
6 実質賃金率

問三 本文全体における筆者の議論の展開として最も適切なもの一つを次から選び、番号で答えなさい。
1 フロイトの理論を手がかりに人間の自己愛の特徴を説明し、その後、産業資本主義における労働の重要性を論証したうえで、情報社会において再び人間が価値創造の中心に戻りつつあることを明らかにしている。
2 ヴェニスの商人の資本主義では差異から利潤が生まれていたことを示し、次に経済学が労働を利潤の源泉とする理論を確立した経緯を説明し、さらに産業資本主義やポスト産業資本主義を検討することで、実際には資本主義において利潤は一貫して差異から生まれており、人間が中心であったという考えは錯覚にすぎないと結論づけている。

3　経済学の歴史を時代順に整理し、重商主義、古典派経済学、マルクス経済学、現代経済学のそれぞれの理論の違いを中立的に比較しながら、それぞれの長所と短所を公平に評価している。

4　産業資本主義において労働者が搾取されてきた事実を指摘し、その後、情報社会における労働の価値の低下を説明しながら、将来の社会では労働者の役割が完全に消滅する可能性を予測している。

5　情報が商品として重要になった現代社会の特徴を説明し、その新しさを強調することで、従来の資本主義とは異なるまったく新しい原理に基づく社会が成立したことを示している。

問四　筆者は、本文全体を通して、資本主義と人間の関係について論じている。筆者は、資本主義と人間の関係がどのようなものであったと考えているのか。次の【使用必須語句】五つをすべて用い、「利潤」と「人間」の関係に触れながら、八十～百字以内で説明しなさい（句読点を含む。語句は順序を変えてもよいが、すべてを用いること）。

【使用必須語句】差異から利潤　／　資本主義　／　人間　／　中心　／　存在してこなかった

問五　本文で表現された筆者の考えと一致するものに○、一致しないものに×を書きなさい。

1　伝統的な経済学は、利潤は地理的な差異ではなく、人間の労働そのものから生まれると考えてきた。

2　ヴェニスの商人の資本主義では、利潤は労働量の増大によってのみ生み出されるとされている。

3　情報が商品として価値を持つのは、それを持つことで他者とは異なる行為が可能になるためである。

4　ポスト産業資本主義の時代では、自らが媒介する差異の意識的な創出により利潤を生み出すことが求められている。

5　マルクスは、商品の価値は純粋に物質的な性質によって決まると考えた。

6　ポスト産業資本主義では、労働の重要性がこれまで以上に増大し、人間が価値創造の中心に復帰した。

7　伝統的な経済学が人間を価値の主体とみなしたのは、歴史的条件によって差異が安定していたためである。

8　ヴェニスの商人の資本主義は例外的なものであり、資本主義の一般的な原理とは異なると筆者は考えている。

三　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

先年、母が横断歩道を渡っている最中に信号無視の自転車に追突され、骨折や打撲などで一カ月余りのA入院を余儀なくされた。長期入院となったのは七十歳代後半という高齢もあるが、信号を無視した高校生はかなりのスピードで走り、横断歩道をそのままのスピードで通り抜けようとし、母に激しく追突した結果とみられる。

一方、混み合う都会のど真ん中の十字路で、信号が青に変わったので横断歩道を渡ろうとしたら、後ろから来た自転車がチリンチリンと鳴らしながら歩行者をどけて横断歩道を渡って行った、などということも目撃した。B何のための横断歩道なのかと思う。

また、横断歩道のみならず、普通の歩道を自転車が猛スピードで走る光景は珍しくない。歩行者は猛スピードの自転車が近づいてくるとあわてて脇にシリ1ゾいたり、場合によっては接触することさえある。お年寄りでなくとも危険だ。

日本ではどうも、自転車は自動車やバイクとは違う乗り物とみなされているらしい。ぶつかってもまあ大丈夫と考えられているかのようだ。C英国と比較すると、これは本当に驚くべきことだ。

英国では、自転車も自動車やバイクと同類の車で、その乗り方にはルールがある。ヘルメットはヒッス2で、D自転車に乗っている人はまずヘルメットをかぶっている。家族で自転車に乗ってツーリングしている光景をよく見かけるが、小さい子も含めて皆ヘルメットをかぶっている。

これに対して日本の場合は、バイクに乗る人はヘルメット着用が義務付けられているものの、自転車については聞いたことがない。自転車でヘルメットをかぶるなんて気恥ずかしいという雰囲気もあるようだ。

また英国の場合、自転車が走るところは歩道ではなく、車道と決められている。歩道を自転車が走っている光景はあまり見たこ

とがない。自転車はまさにクルマと考えられているのだ。だから歩道を走れないのも当然といえる。

これは言ってしまえば、ルールの違いなのだが、なぜこうしたルールの違いがあるのかを考えることは日英比較の上でシサにトむ。

英国の発想はあくまでも歩行者中心というか、歩道は歩行者のものという点をはっきりさせている。危険度をハカり合理的に判断した結果、人には危険ということで、自転車は車道を走るようになったのだろう。自転車に乗る人はそれだけの危険を覚悟しなさいと言っているようだ。

これに対し日本の場合は、実に自転車に甘い。日本は、歩道は歩行者のものという点の共通認識はあるものの、自転車に限ってはあいまいになる。それだけ自転車の数が多く、取り締まれないという実情もあるのだろう。これは、自転車が数多く走る中国やベトナムなどとほとんど変わりがないと言えなくもない。

（倉沢　章夫『ロンドン特派員余録――イギリスの裏庭から』による）

〔注〕日本においても二〇二三年の改正道路交通法の施行により自転車の利用に関するルールが変更され（ヘルメット着用の努力義務化、車道走行の原則等）、注意が必要である。

問一　傍線部1～5のカタカナを漢字で書きなさい。楷書で丁寧に正確に書くこと。

問二　波線部A「入院を余儀なくされた」の説明として、最も適切なものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　入院が長引いた
2　入院の余裕がなくなった
3　念のために入院することになった
4　入院せざるを得ない状況になった
5　入院して様子を見ることになった

問三　波線部B「何のための横断歩道なのかと思う」とあるが、この時の筆者の気持ちとして最も適切なものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　横断歩道にはどのような役割があるのか、改めて純粋に疑問に思っている。
2　横断歩道が形骸化している現状に憤慨している。
3　横断歩道がうまく機能していないことを疑問に思っている。
4　横断歩道は自転車が優先的に通行してよいことを再確認している。
5　横断歩道で怪我をした母親のことを思って、悲しくなっている。

問四　波線部C「英国と比較すると、これは本当に驚くべきことだ」とあるが、筆者は何を比較してどう驚いているのか。説明として最も適切なものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　英国では自転車は車やバイクと同類であると法律で定められており、ヘルメットの着用が義務付けられているのに対し、日本では車やバイクとは違う乗り物であると法律で定められているため、バイクとは違いヘルメットをかぶる必要もない。歩道を走ることも日本では認められている。法律での扱いの違いに筆者は驚いている。
2　日本では、自転車は人にぶつかっても大丈夫と考える人が多く、子どもや中高生が主に利用していて、ヘルメットをかぶるのは恥ずかしいという雰囲気がある。一方、英国では通学で利用するというより家族でツーリングを楽しむための乗り物だから、親は子どもの安全を考えてヘルメットをかぶせるし、子どもに恥ずかしい思いをさせないために親もかぶる。自転車やヘルメットに対する人々の考え方の違いに、筆者は驚いている。

3　英国では自転車は車やバイクと同類であると人々は考えており、自転車に乗る際には大人も子供もヘルメットをかぶらなければならない。ヘルメットをかぶることを恥ずかしいと思う人は一人もおらず、安全を考えたら当然の事だと思っている。一方、日本では、自転車は車やバイクとは違う乗り物だと人々は考えており、自転車に乗るのにヘルメットをかぶるのは恥ずかしいと考える。ヘルメットをかぶることに対する人々の感じ方の違いに筆者は驚いている。

4　日本では、高校生が自転車で歩道を猛スピードで走ったり、歩行者と接触することが日常的に見られるのに対し、英国では歩道を走る自転車を見たことがない。それは、日本では自転車が歩道を走るのはあたりまえだと考えられているし、法律でも明確な定めがないのに対し、英国では歩道は歩行者のためのものであり、自転車は車と同じ車道を走るものであると法律で明確に定められている。歩道に対する法律上の扱いの違いに、筆者は驚いている。

5　英国では、自転車は車やバイクと同類だから、乗る人にとっても、歩行者に対しても危険なものであるという認識があり、自転車に乗る時はヘルメットをかぶるし、歩行者のための歩道を自転車が走ることもない。一方、日本では自転車の危険性に対しての認識が英国に比べて甘く、ヘルメットをかぶるのは恥ずかしいという雰囲気があったり、歩道を猛スピードで走ったりしている。自転車の危険性に対する認識の違いに筆者は驚いている。

問五　波線部D「自転車に乗っている人はまずヘルメットをかぶっている」とあるが、「まず」がこの場合と同じ用法で用いられているものを次から二つ選び、番号で答えなさい。

1　まず暗証番号を入力し、そのあと金額を入力してください。

2　無事に終わってよかったですね。片づけるのは後にして、まず一休みしましょうか。

3　血圧も心拍も落ちてきているから、この様子ではまず助かるまい。

4　この研究をやるなら、まずデータを集めることだよ。

5　これだけ準備をしたんだから、まず大丈夫だろう。